

## 仏の心を心として

### 我等の目標

- その一……………
- その二……………
- その三……………
- その四……………
- その五……………

### 我等の目標 その一

「私どもは、仏の心を心として一生涯、尊いみ法を求めつづけて、はつきりと人生の意義をつかんで生きましよう。」

### 仏の心を心として

私どもが、何事をするのにでも、問題になるのは、

どんな心で

何をしたか

この二つであります。

形の上では、どんなにいいことに見えても、その心が悪かったらいいことと言えませんが、

自分の勝手ばかりや、極端な欲や、人を陥れてやるためや、つまらない感情や、そんなことでしたことに、決して美しい実を結ばうはずがありません。

私どもは、何時も何時も失敗ばかりくり返しています。

私は何時も思っています。世界中の新聞がよってたかって私を攻撃したとします。それも怖い、それよりも、もつと恐ろしいことは、私の心の中に悪いものがあることです。

誰にも彼にも褒められた所が、私の心の中に悪いものがある間、私はちつとも嬉しくはない。

「私の心を、きれいな水晶のようにしたい。」

それは、本気で考える人なら、誰でもが願うことであります。

世には、ちつともこの願いのなくなつた人があります。

それは、とても尊いお方か、

或いは、魂の腐つた人かであります。

支那の孔子様は、毎日、我が身を反省する道ふりかえを説かれました。

吉田松蔭先生も、お弟子に、内省を教えておられたそうであります。

ギリシヤの聖者、ソクラテスが「汝、自身を知れ！」と言って、人々を誡めたことは、誰でも知っていることです。

「そんなことは古い古い。現代の青年には、古いぞ。」  
果たしてそうでしょうか。

早い話が、家庭の中に一人でも、この心がけのない者がいると、決して円くは治まりません。

なぜなら、こうした心がけのない人は、必ず、自分勝手にやっても平気ですから。

どうにかして、私の心に、悪い思いがおこらないように、私のすることが悪でないように。

そう心掛けますと、今まで知れなかつたものが、沢山私の上に見出されて来ます。底がないほど、数えきれぬほど私の心の中に悪いものがあることが知れて来ます。ここで、誰でも、はたと行きづまります。

蓮如様は、「自分のところに、これは自分の悪い所だぞと、気のつくほどの悪は他人から見れば、大変に悪いことだから気をつけろ。」と教えられました。

人の悪口なら平気で言えるが、自分の悪口を、自分に言いつて聞かせる人が、少なくなつたのが、今の世でありますまいか。

そこで、自分で自分の悪いのに困つた人、それが親鸞聖人でありました。  
どうにか出来ないか。

そこに開いた道が、み仏を念ずる道でありました。

ところが、み仏を念ずるといふのは、み仏はじつとして何もしないでいられて、私どもだけが念ずるのであるか、というところ、そうではなかつたのです。

仏こそ、私を念じつづけて下さる。

その仏のみ心と、私が仏を念ずる心と、ちがつたものではない。

つまり、仏のみ心によつて、仏を念ずるのだと、わかつて来ました。

このみ仏の心が、私の心となつて下さることを「信」といふのであります。

それなら、その時には、心は水晶のようになるのか、と云いますと、そうではないのです。

水晶とは、仏の心であります。

私の心を水晶にしようたつて、それは、泥をこねて蓮の華にするよりもむつかしい。そこで、泥の中に蓮が咲くように、悪い心の中に、仏の水晶の心を頂くのです。そのみ仏の心が、ものを言うのであります。

み仏は尊い。

み仏は清い。

み仏は温かい。

み仏は鋭い。

そのみ仏の心を心として、生きてゆくのが、私どもの生きる道であります。  
み法を求めて

「二生涯、尊いみ法を求めつづけて……………」  
仏の心を心として、私どもは、まず、どう生きたらいいのでしょうか。  
それについて当然、第一に出て来ることは「み法を聞く」ということです。  
もちろん、み法を聞いて、仏のみどころが、わかるのではあります。しかし、一度  
わかつたら、それでいいかといえますと、それではいけません。  
体には、毎日三度の食事を与えます。  
然れば、心にも食物を与えねばなりません。み法は心の食物です。  
もし、人間でも、小さい時から猿と一緒にして大きくすると、遂に、猿のすること  
より外、知らないそうです。  
そこで、人の人たる所以は、どれだけ、高い教えを受けたか、どれだけ、深いみ法  
を聞いたかということにあると言つても差し支えありません。  
ですから、真剣に生きる人は必ず、一生涯かかつて、求めます、聞きます。  
私どもは、もう大方四十歳になりますが、内に省みれば、何もわかつていません。  
ほんとに、たった昨日出発したばかりであります。何でじつとしていられましょう。  
しかも、すこしでも聞けば聞くだけ、無限の深さが待っています。

### 人生の意義

「はつきりと人生の意義をつかんで生きましょう。」  
毎日、山へ川へと働いている人を、今更大学者にすることも出来ません。  
五六十のお婆さんを、今更博士にも出来ません。  
世界中のそれぞれの人を皆、大金持ちに、高等官にすることも出来ません。  
しかし、それぞれの人に、み仏の心を伝え、それぞれの世界において、自分を真に  
生かすきつて、よろこび生きる道を与えることなら出来ます。  
人間に生まれたことを喜び、たとえ、どんな苦しみがおしよせても、その中に、そ  
れをはね返して生ききつてゆく力を得ることが一番大切であります。  
浜の砂粒一つも、あるべき理由があつてあり、草一本も、天地の相に育つて、天地  
の相に、花を咲かせています。  
私どもも、正しい生き方を知らせて頂き、天地の道理、即ち、み法の相に生きさせ  
て頂きたいものであります。  
「私どもは、仏の心を心として、一生涯、尊いみ法を求めつづけてはつきりと人生の  
意義をつかんで生きましょう。」